

地域情報（県別）

【沖縄】小児在宅とショートステイを実施、デイサービスも構想-宮城大雅・ゆくいこども診療所 所長に聞く◆Vol.3

ショートステイは開始前に多くの問い合わせ「ニーズ高い」

2025年7月2日（水）配信 m3.com地域版

2025年4月に開院した「ゆくいこども診療所」（南城市）では、子どもをトータルに支えたいと、外来診療だけでなく小児在宅医療を行い、ショートステイも近く始める予定だ。同市の小児科での在宅実施は初めてであり、クリニック併設型ショートステイは県内初だという。さらに、将来的には重心型児童デイサービスを行う構想もある。宮城大雅所長に多彩な活動内容と現在の手応えを聞いた。（2025年5月15日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第2回は[こちら](#)



宮城大雅氏（本人提供）

——ゆくいこども診療所では、宮城先生の勤務医時代の経験を生かし、医療的ケア児への在宅医療も行っています。小児在宅を行う医師は全国的に少ないと聞きます。

医療の進歩によって救命できる子どもが増えた一方、在宅医療を提供できる小児科医の数が追いついていないのが全国的な実情だと思います。南城市でも在宅医療を行っている小児科は当院のみです。そもそも、南城市には小児科が3つしかなく、隣の八重瀬町には1つのみ。地域として小児医療のリソースが足りていない状況です。

——現在の患者数とスタッフ体制を教えてください。

開院してまだ1カ月半なので、1日の外来患者数は20～30人ほどです。このうち重症心身障害児（以下、重心）は2、3人、人工呼吸器を使っている子は週に1人ほど来院されています。在宅医療では、医療型障害児入所施設「沖縄南部療育医療センター」で診ていた患者さんを中心に8～10人ほどを担当しています。

外来では成人の障害者も診療しており、現在の最高齢は57歳です。こちらも同センターで診ていた患者さんです。私はセンター勤務時代に病棟を担当しており、患者さんのうち8割は成人の方でした。子どもから大人まで呼吸に困っている人に対応できるので、障害を抱える成人の方で、相談できる医療機関がないなどお困りであれば新患も受け入れたいと考えています。

当院の経営母体は先ほどお話ししたNPO法人「ひだまり」ですが、スタッフの雇用や調整はほぼ私が担っています。当院は一般小児診療だけでなく重心の子も支えている特徴があるので、過去に当事者をサポートした経験のある人や、経験がなくても「子どもたちの力になりたい」といった情熱を持っている人を積極的に採用しています。現在の体制は医師1人、看護師3人、保育士1人、医療事務1人、一般事務3人の計9人です。

クリニック併設型ショートステイは医療面のスピードが強み

——資料によると、先生は医療の提供だけでなく、ショートステイやデイサービスの事業も構想しているそうですね。

重心児者への医療型ショートステイ施設は全国的に不足しており、勤務医時代からサービスを提供したいと考えていました。院内に専用のスペースを確保しており、現在、人員と物品を調整しているところです。近く試験的に1日1人ずつ受け入れていく予定で、将来的には1日4人まで対応できるようにしたいと考えています。実現すれば、小児科クリニック併設型のショートステイとしては沖縄県で初めてのものになると思います。

クリニック併設型の場合、院内で検査や診療ができるため、受け入れ可否の検討や有事の医療行為をスピーディーに行えるのが大きな強みです。既に10～20人ほどの親御さんから問い合わせや利用希望をいただいております。ニーズはかなり高いと感じています。重心型児童デイサービスも将来的に行いたいと考えており、現在、院外で物件を探しています。

——医療的ケア児を地域で支えていくには、福祉分野との連携も重要になってくるのでしょうか。

そうですね。福祉や教育に携わっている人との連携は大切であり、当院もこれから強化していきたいと考えています。私が過去に勤務していた沖縄南部療育医療センターの中に「沖縄県医療的ケア児支援センター」があり、ここが医療的ケア児に関する総合相談窓口として情報を持っているので連携していく予定です。

続いて、医療的ケア児の子どもを持つ「相談支援専門員」が入職する予定なのでこの方に行政や福祉施設との連携役として活躍していただきたい思いがあります。相談支援専門員とは、介護業界におけるケアマネジャーのような存在で、医療的ケア児の親御さんと面談して福祉サービスのご提案などをする仲介役。当院では福祉サービスの一つであるショートステイを行っていくので、専門家に入職していただくことにしました。

もう一方の、教育との連携は勤務医時代から行っています。教育委員会から「来年はこのような状態の子が入ってきますがどんなことに注意すればよいですか」などと相談を受け、校内での安全確保などについて提案や助言をしています。クリニックとしても周囲の学校と連携し、有事の医療提供を含めて医療的ケア児が学校に通いやすいようサポートしていきたいです。

自閉症の子が自らクリニックを見つけ「ここに行きたい」

——クリニックが開院して1カ月半が経ちます。所長としてのやりがいをどう感じていますか。

率直に言うと、開院時は久しぶりの一般小児診療にドキドキしていました（笑）。1カ月半が経った今は、診療後に笑顔で帰っていく子の姿が見られるので、そこは自分でも驚いています。本当に子どもに元気を与えられているのだなど。自閉症や発達障害、重心の子が普通に来院・受診できる環境を提供できている手応えを感じます。

——取材の中で、患者や家族からの反響に「びっくりしている」という先生の言葉が多く、それが印象的です。

やはり環境とシステムの工夫、医療機関っぽくない空間演出が奏功したのではないのでしょうか。というのも、自閉症の子の場合、診察室のドアを開けて私の顔を見た途端に逃げてしまう、といったことが勤務医時代にありましたが、当院ではよく待ってくれるんですね。さらにうれしかったのは、自閉症の子が自ら当院を探して親御さんに「ここに行きたい」と言ってくれたこと。その子は19歳で、ホームページかSNSを通して見つけてくれたのでしょうか。これらの出来事には驚きました。

自閉症の子は嫌なものがあると拒絶しがちですが、当院がそうは感じない空間として、自分のテリトリーとして認識されたのでしょうか。見知らぬ人が周囲にいる待合室が介在せず、自宅から診察室まで直行できる空間設計が生きていると思います。



待合室と診察室が一体となった「ゆくい室」（ホームページから引用）

——その一方で、現在感じている課題感と小児科医としての思いを最後にお聞かせください。

課題はチームづくりですね。先ほど話したように当院にはパッションのある人が集まっているので、その分、意見が分かれることがあります。クリニックのリーダーとしてそこをうまくまとめ、患者さんご家族に良い診療とサービスを提供していきたいです。

重心の子を診てきた小児科医としては今後も、「どんな子どもも特別な一人」として向き合っていきたいです。重心の子はともすれば区別されたり、レッテルをはられたりしがちですが、個々に異なる特性を持っているのだと思います。こういった価値観をクリニックの仲間や地域の関係者と共有し、私の父と同様に、「子どもを支えるためにはどうすればいいか」を考え、行動し続けたいです。

◆宮城 大雅（みやぎ・ともつね）氏

2011年琉球大学医学部卒。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターでの初期・後期研修修了後、離島研修として沖縄県立宮古病院小児科に在籍。「生涯医療クリニックさっぽろ」と「ゆずりは訪問診療所」で小児等在宅医療を行い、医療型障害児入所施設「沖縄南部療育医療センター」で療育を学ぶ。2025年4月から「ゆくいこども診療所」所長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

